

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：32608

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820047

研究課題名（和文）東欧の体制転換と亡命文学の多様性

研究課題名（英文）Exile Literature of East Europe before/after 1989

研究代表者

奥 彩子 (OKU AYAKO)

共立女子大学・文芸学部・専任講師

研究者番号：90513169

研究成果の概要（和文）：

2011 年度におこなってきた東欧地域研究の研究会の成果として、論集『東欧地域研究の現在』を出版するにいたった。本論集には、狭義の東欧（ドイツ語圏と旧ソ連圏をのぞいた、ヨーロッパの旧共産圏の国々）のすべての国についての論考が収められているという、東欧研究のなかでも類例のない規模の論集となっている。申請者はこの論集に編者の一人として参加し、さらに、自らも東欧の女性作家についての論考を執筆している。また、亡命の諸相に関しては、ダヴィド・アルバハリ、ウグレシッチ、アレクサンドル・ヘモンらを論じた論文「記憶の変奏—ユーゴスラヴィア解体と文学的ディアスポラ」（『ユーラシア世界 2 ディアスポラ論』東京大学出版会、2012.7）を発表した。

研究成果の概要（英文）：

As a result of the study group of Eastern Europe Research which has been conducted since 2011, edited volume *Current East European Area Studies* was published in 2012. My paper deals with the development of “women literature” in Eastern Europe, focusing on the latest novel of Dubravka Ugresic.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：亡命、東欧、ディアスポラ

1. 研究開始当初の背景

(1) 「移動の世紀」と呼ばれる 20 世紀は、

国家の枠組を超えた文学を多く生み出した。亡命文学、越境文学、移民文学などと名付けられる、これら「転位の displaced」文学に

については、理論的な研究は盛んに行われているものの、世界に共通する現象という範囲の広さ、名称の多様性からもうかがえる形態の複雑さに阻まれて、総合的な視座に基づく実態的な研究が十分に行なわれているとは言いがたい。グローバリゼーションと連動した研究であるため、とくに、ポストコロニアル文学のメジャーな言語で書かれたものについては成果が著しいが、アジア、東欧などのマイナーな言語は研究の潮流から取り残されており、今後の課題となっている。

(2) 東欧は、ドイツとロシアという二つの大国に挟まれて、つねに、政治的緊張を強いられてきたため、亡命、移民による文学の歴史は長い。ロシア・東欧亡命文学の質の高さは、複数のノーベル賞作家を輩出していることから明らかであり、文学と亡命の関係を考察することは、文学研究全体にとっても有意義であるといえる。20世紀のロシア・東欧文学を中心として論じた研究としては、沼野充義『亡命文学論』(作品社、2002)、西成彦『エクストラテリトリアル—移動文学論 2』(作品社、2008)があげられる。これらの研究が、他地域の文学研究に与えたインパクトの大きさは、この地域の文学研究の潜在力を物語っている。とはいえ、東欧文学の特色でもある多言語性のゆえに、全体的な研究は困難と言わざるをえない。なかでも、バルカンの文学についての研究は、国内ではほとんど行われていないが、90年代のユーゴスラヴィア解体に象徴されるように、バルカン半島は政治的な不安定さゆえに「移動」が多くみられた地域であり、東欧文学を総合的に検討するうえで、もっとも重要な研究対象といえる。

(3) 海外では、欧米を中心として、移動をめぐる全般的な研究(たとえば、John Glad ed., *Literature in exile*, Duke University Press, 1990)が盛んに進められている。東欧においても、2006年にはハンガリーの高等研究機関でワークショップ「20世紀東欧の亡命文学」が行なわれるなど、国境を超えた文学は脚光をあびつつけている。しかし、欧米の理論研究は政治的・思想的問題に重点を置かれている一方、東欧各国の個別研究はそれぞれ高い専門性を有するものの、世界に共通の課題として把握する視点を欠いていることなど、どちらも問題を抱えている。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、共産主義体制下において亡命した東欧出身の文学者と、1989年の体制転換以降に故国を離れた文学者との比較を通して、20世紀文学を特徴づけていた「亡命文学」の意味を問い直し、「世界文学」の文

脈に位置づけることを目的としている。「移動」の文学については、ポストコロニアル文学のメジャーな言語で書かれたものについては成果が著しいが、アジア、東欧などのマイナーな言語はまだ研究が十分とはいえない。未踏の沃野と言われる東欧の文学を、その多様性のなかに通底する共通の詩学を探るといったテーマを設定して研究することは、きわめて現代的な課題と言える。

(2) 具体的には、日本学術振興会特別研究員(PD)として平成22年度に開始した『1980年代東欧亡命作家における「ヨーロッパ」の表象』を継続することを主眼とし、三つの目的を立てている。(1)「世界文学」の理論的な枠組みの可能性、(2)比較軸としての1989年の体制転換後の東欧文学、(3)1980年代にパリに亡命した東欧出身の作家についての研究である。

3. 研究の方法

(1) 本研究の特質は、「東欧」という多言語空間に、共通の文学的特性をみるという視座を設定する点にある。このことは、言語の壁によって隔てられてきた従来の東欧の文学研究を、言語と国家という枠組みからいったん切り離して総合的に検討しようという近年の研究動向に倣うものでもある。そのため本計画においては、他の研究者との連携によって研究上の盲点を補強することが必要となる。この点で、申請者は、国際会議への参加(2008年度には、セルビア翻訳者会議、ザグレブ、ベオグラードにおける国際シンポジウムでの発表、国際スラヴィスト会議への参加)、二カ月に一度の共同研究会の開催のほかに、国内外研究者、文学者の招聘(2008年度には東京大学名誉教授栗原成郎氏、ベオグラード大学助教授山崎佳代子氏、ウィスコンシン大学教授トミスラヴ・ロンギノヴィチ氏の三氏を大阪大学グローバルCOEプログラムの枠内で招聘、国際交流基金の招聘によるハンガリーの現代作家エステルハージ・ペーテルの受入)、東欧文学に関するシンポジウムの開催(沼野充義東京大学教授、西成彦立命館大学教授、早稲田みか大阪大学教授、石川達夫神戸大学教授)などを、積極的に企画し交流を行い、多彩なバックグラウンドを持つ研究者からの意見を摂取して東欧文学に関する全体的な見地を補強してきた。こうした人的ネットワークを生かして、東欧亡命文学の研究をすすめる。

(2) 現代文学研究では、越境や移動といった問題が重要になっている。東欧亡命文学をその流れに位置づけるために、世界文学の概念を用いる。いわば理論研究の土台となる

「世界文学」の概念とその可能性については、また、移動をめぐる文学を、2010年度にハーヴァード大学教授デイヴィッド・ダムロシュのもとで「世界文学」の研究を行っている。それに先立ち、ダムロシュの主著『世界文学とは何か?』の翻訳研究会を立ち上げ、約一年半かけて六名の若手研究者による共同翻訳に取り組み、出版している(デイヴィッド・ダムロシュ著、秋草俊一郎、奥彩子、桐山大介、小松真帆、平塚隼介、山辺弦訳『世界文学とは何か』、国書刊行会、2011年4月)。本研究期間においては、同教授が中心となって行っている夏季セミナーへの参加等を通して、東欧文学の世界文学における位置づけについて、世界各国からの参加者と討議し、考えを深め、東欧亡命文学研究に生かしていく。

4. 研究成果

(1) 研究計画の初年度である2011年度は、東欧亡命文学について多角的に考察するために、「東欧」という地域についての検討を行ってきた。とくに、2011年には、東欧地域研究の第一人者である柴宜弘・東京大学名誉教授を中心とした研究会を企画し、計3回、報告者9名の研究発表の場を設け、東欧地域研究にかんする意見交換を行った(この研究会は申請者が中心となって2009年に行ったシンポジウム「東欧地域研究の現在、そして未来への展望」を継続しているものである)。この研究会での意見交換などを経た後、研究会参加者17名による論集『東欧地域研究のいま—トランスレトリアルな視点から』(山川出版社、近刊予定)が出版されることになった。

(2) また、2012年1月にはシンポジウム「中東欧を「翻訳」する」(於立教大学・1月28日)にコメンテーターとして参加し、ミラン・クンデラの研究翻訳で知られる西永良成・東京外国語大学教授、山本浩司・早稲田大学准教授、柴田元幸・東京大学教授ら、東欧以外を専門とする研究者と意見交換を行った。

(3) これらの研究交流を通して、自らが専門とする旧ユーゴスラヴィア以外の東欧地域の歴史的文化的背景について理解を深め、「東欧」の亡命作家を考察するうえでの問題点を明確にした。

(4) 2011年度におこなってきた東欧地域研究の研究会の成果として、論集『東欧地域研究の現在』を出版するにいたった。これは企画責任者として総合司会を務めたワークショップ「東欧地域研究の現在、そして未来へ

の展望」(2009年度地域研究コンソーシアム「次世代ワークショップ」採択、2010年1月、於東京大学)の書籍化でもある(同ワークショップは150名近い聴衆が訪れるなど大きな反響を呼んだ)。本論集には、狭義の東欧(ドイツ語圏と旧ソ連圏をのぞいた、ヨーロッパの旧共産圏の国々)のすべての国についての論考が収められているという、東欧研究のなかでも類例のない規模の論集となっている。申請者はこの論集に編者の一人として参加し、さらに、自らも東欧の女性作家についての論考を執筆している。この論文では、東欧女性作家の歴史を中世から丹念に追いかけて、旧ユーゴスラヴィア出身の亡命作家ドゥブラヴカ・ウグレシッチを「東欧」の作家であるとみなすことの意味について論じている。

(5) また、亡命の諸相に関しては、ダヴィド・アルバハリ、ウグレシッチ、アレクサンドル・ヘモンらを論じた論文「記憶の変奏—ユーゴスラヴィア解体と文学的ディアスポラ」(『ユーラシア世界2ディアスポラ論』東京大学出版会、2012.7)を発表した。

(6) 2012年7月には国際世界文学セミナー(於トルコ・イスタンブール)に参加し、世界各国から参加した若手研究者と意見交換を行った。なかでも東欧の演劇に関するセミナーを通して、東欧文学の独自性を確認できたことは大きな成果であった。

(7) さらに、2013年に東欧文学の見取り図を描いた編著『ガイドブック東欧の想像力』を刊行予定であるが、2012年夏に構成を大幅に見直し、東欧以外地域で活躍する東欧系作家についても加えることとなった。こうした研究を通して、「東欧」の枠組みの有用性を確認しつつ、亡命文学の多様さについての検討を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計2件)

- ① 柴宜弘・木村真・奥彩子編、東欧地域研究の現在、山川出版社、2012、366.
- ② 奥彩子、記憶の変奏—ユーゴスラヴィア解体と文学的ディアスポラ、塩川伸明、小松久男、沼野充義編、ユーラシア世界ディアスポラ論、東京大学出版会、2012、229-251.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥彩子 (OKU AYAKO)
共立女子大学・文芸学部・専任講師
研究者番号：90513169

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：